

イスラエル アンベールド Vol.1「エマオ」



英語版オリジナル 2017年4月14日公開: Israel Unveiled Volume 1: Emmaus

<https://youtu.be/BEUyvrjMAYA>

メッセージ by アミール・ツアルファティ

Behold Israel : <http://beholdisrael.org>

ここは、古代の村、エマオがあった場所です。エマオという名前は、ハムマーというヘブル語に由来します。ギリシャ語は、例えば「アンティオコス」のように、よく語尾に「オス」をつけます。そのため、この辺りに温泉があったことからきた、「温泉」という意味のハムマーという地名が、最終的にはエマオ(Emmaus-エマオス)となりました。ルカの福音書24章によると、ここが、イエスが復活された日に、二人の弟子がエルサレムから歩いて来ていた村でした。ここはアヤロンの谷の縁に位置しています。アヤロンの谷は、私が今立っているこの場所から、北東に数マイルの所にある、ギブオンでの戦いに勝利する為に、ヨシュアが太陽と月に向かって動くなど命じた時、月がとどまった所です。ここは、決して、平凡な場所ではありません。

ここでは、古代の家屋の跡や、後にルカの福音書24章の出来事を記念して建てられた教会が見つかるだけでなく、この地域の岩盤に切り込まれて作られた、ユダヤ人の墓の一群も見つかっています。それらの墓から、エルサレムにあったイエスの墓がどのようなものであったかを、容易に彷彿する事が出来ます。イエスの時代には、人々は墓の中に埋葬され、肉の部分が分解されると、埋葬から11か月後に、その遺体は小さな納骨箱に移されていました。エルサレムにあるドミヌス・フレヴィ教会に、そのような納骨箱がいくつか見つかっています。オスアリとして知られるそれらの箱の大きさは、人の体の最も長い骨の長さと同じでした。誰の骨も、箱に収めるために折られることはありませんでした。箱の方が、その人の一番長い骨に合わせられなければなりません。ここにある数々の墓や遺跡、それに五、六世紀のビサンチン時代に、ここに教会が建てられ始めたこと、また、十二世紀の大きな十字軍教会もあったという事に加え、温泉の真上に浴場が発見されたことで、ここは、復活の主イエスが、ご自身を顕されたときに、二人の弟子が歩いていた場所であろうと見られるようになりました。

ルカの福音書24章の記述をお読みしたいと思います。その二人の弟子がこの村へと歩きながら、何を考えていたのかを理解するためには、一番初めの部分から読む必要があるでしょう。

「週の初めの日の明け方早く、女たちは、準備しておいた香料を持って墓に着いた。見ると、石が墓からわきまのところに置いてあった。はいて見ると、主イエスのからだはなかった。そのため女たちが途方に迷っていると、見よ、まばゆいばかりの衣を着たふたりの人が、女たちの近くに来た。恐ろしくなって、地面に顔を伏せていると、その人たちはこう言った。『あなたがたは、なぜ生きている方を死人の中で捜すのですか。ここにはおられません。よみがえられたのです。まだガリラヤにおられたころ、お話しになったことを思い出さない。人の子は必ず罪人らの手に引き渡され、十字架につけられ、三日目によみがえらなければならない、と言われたでしょう。』女たちはイエスのみことばを思い出した。そして、墓から戻って、十一弟子とそのほかの人たち全部に、一部始終を報告した。この女たちは、マグダラのマリヤとヨハンナとヤコブの母マリヤとであった。彼女たちといっしょにいたほかの女たちも、このことを使徒たちに話した。ところが使徒たちにはこの話はたわごとと思われたので、彼らは女たちを信用しなかった。しかしペテロは、立ち上がると走って墓へ行き、かがんでのぞき込んだところ、亜麻布だけが残っていた。それで、この出来事に驚いて家に帰った。
(ルカの福音書24:1-12)」

この時点では、ペテロも、最初に墓に来た女たちも、イエスがよみがえられたという事実にに関して、それを大いに喜んだり、ひげらかしたりしてはいませんでした。実際、二人の御使いがその墓に現れるまで、彼らは復活ということに思い当たりもしませんでした。そして、御使いたちに「ほら、イエスがまだガリラヤにおられたころ、三日目によみがえらなければならないと言われたでしょう」と言われて思い出した時でさえも、喜ぶことも嬉しがることも全くなく、復活が何を意味するのか、全く理解もしていませんでした。彼らは目にしたことを不思議に

思いながら、家に帰っていきました。ですから、死ぬために来られただけでなく、よみがえるため、そしてそれによって死に打ち勝ち、すべての罪を終わらせるという、メシヤの真の役割は、古くからの弟子たちにはまだ実質として把握されていなかったのです。そこで、聖書にはルカの福音書24章13節に、こう続けられています。

「ちょうどこの日、ふたりの弟子が、エルサレムから十一キロメートル余り離れたエマオという村に行く途中であった。そして、ふたりでこのいっさいの出来事について話し合っていた。(ルカの福音書24:13-14)」

私たちにとっては、車で15分の道ですが、彼らにとっては、ほぼ丸一日かかる徒歩の旅でした。それが実際に正確に7マイル(約11km)であったのか、どの地点から計測されたのか、よく分かりませんが、シナイ山で発見された文書の中には、その数字が7ではなく実は17(約27km)であったものもあります。確実に分かっているのは、私たちが今、古代の温泉があった場所、ユダヤ人の墓が見つかった場所、古代の教会が重なって建てられていた場所にいることです。そして、それが聖書の記述に当てはまることから、私たちはこの場所に違いないと思っています。おもしろいのは、彼らがこの場所へと歩いてくる途中のことです。

「話し合ったり、論じ合ったりしているうちに、イエスご自身が近づいて、彼らとともに道を歩いておられた。しかしふたりの目はさえぎられていて、イエスだとはわからなかった。(ルカの福音書24:15-16)」

彼らの目はさえぎられていました。彼らにはイエスだと分かりませんでした。彼らはイエスは死んだものと思っており、復活も実感として理解されなかったので、イエスが一緒に並んで歩いているのに、彼らはエルサレムで起こったことにすっかり当惑していました。そこで...

「イエスは彼らに言われた。『歩きながらふたりで話し合っているその話は、何のことですか。』すると、ふたりは暗い顔つきになって、立ち止まった。(ルカの福音書24:17)」

何ということでしょう。この二人の弟子のうちの一はクレオパという名前でしたが、もう一人の弟子は、名前も分かりません。彼らは、墓が空であることを知った上で、エルサレムからずっと歩いていました。イエスは彼らが話し合っていることだけでなく、悲しんでいるのに気づかれました。今も多くの人がイエスの死を悲しみ、悼み、泣いているとは、何と悲しいことでしょうか。彼らは、一日中、黒い喪服を着て過ごし、教会に入って十字架を見て泣きます。彼らはイエスがもうそこにはおらず、よみがえられたことは分かっています。イエスに関する話の中でも、最も素晴らしいものは、イエスの復活です。そのことが実感として把握できていない人たちが、クリスチャンだと自称する人たちの中にまで、世界中に何億人もいるのです。そこでイエスは彼らに、何を語り合っているのか、またなぜ悲しんでいるのかと尋ねられました。

「クレオパというほうが答えて言った。『エルサレムにいながら、近ごろそこで起こった事を、あなただけが知らなかったのですか。』(ルカの福音書24:18)」

エルサレム中のすべての人たちが、西暦32年の過越しの祭りに起こった出来事を耳にしていました。イエスが嘲られ、打たれ、むち打たれ、十字架へと引いて行かれ、両脇にいた二人の盗人とともに十字架につけられ、安息日に入る間際に十字架上で死に、アリマタヤのヨセフと呼ばれた裕福な人物の墓に入れられ、三日目の日曜日の朝にはもうその墓にはいなかったということを、聞いていない人は一人もいませんでした。誰もがそのことを耳にしましたが、誰一人として、その意味を本当には理解していませんでした。

「イエスが、『どんな事ですか。』と聞かれると、ふたりは答えた。『ナザレ人イエスのことです。この方は、神とすべての民の前で、行ないにもことばにも力のある預言者でした。それなのに、私たちの祭司長や指導者たちは、この方を引き渡して、死刑に定め、十字架につけたのです。(ルカの福音書24:19-20)」

それから彼らが言ったことに注目してください。

**「しかし私たちは、この方こそイスラエルを贖ってくださるはずだ、と望みをかけていました。
(ルカの福音書24:21)」**

「私たちは、望みをかけていました」と。過去形です。それは次のことを意味していました。

- A. 彼らには別の望みがあったこと
- B. イエスが贖い主であるという望みは、もはやなくなっていたこと

彼らは、彼らの望みを、イエスの死に対する嘆きと悲しみとにすり替えました。イエスは彼らの計画に従わなかったのです。イエスはそのモジュールに合わなかったのです。イエスは、彼らの理解するメシヤ像に適さなかったのです。イエスは死んでしまいました。彼らの筋書き、彼らの計画、彼らの望みによると、その脚本には「死」は含まれていなかったのです。聖書には続いてこう書かれています。

「事実、そればかりでなく、その事があってから三日目になりますが、また仲間の女たちが私たちに驚かせました。その女たちは朝早く墓に行ってみましたが、イエスのからだが見当たらないので、戻って来ました。そして御使いたちの幻を見たが、御使いたちがイエスは生きておられると告げた、と言うのです。それで、仲間の何人かが墓に行ってみたのですが、はたして女たちの言ったとおりで、イエスさまは見当たらなかった、というのです。』(ルカの福音書24:21-24)」

この二人の弟子は、現実起こったイエスの復活について報告しながら歩いているのに、まだ悲しみと悼みの中にいました。何と悲しいことでしょう。福音の話を知っていながらも、それを本当に理解しない人たちがあまりにも多いのです。彼らは復活の意味を理解していません。彼らはメシヤの真の役割を理解していません。彼らは、イエスの受難が、彼をメシヤ失格にするものではなく、実際にメシヤとしての資格を与えるものであることを理解していません。

詩篇22章も、イザヤ書53章も、ゼカリヤ書12章も、苦しみを受けるメシヤについて語っており、メシヤが死ななければならないことについて語っており、メシヤが私たちすべての者の罪を負われたという事実について語っており、メシヤが戻って来られる時に彼らは自分たちが突き刺した者を見て嘆き、自分たちがいかに愚かで間違っていたかを理解して泣くという事実について語っています。イエスは、書士たちの言葉に適合せず、律法学者たちの言葉に適合せず、教師たちの言葉に適合しませんでした。イエスは預言者たちの言葉、つまり、神のみことばにぴったり合いました。そしてそれこそが、今日のこの世界における問題なのです。人々は人間の教え、人間の教義、人間の考えに従い、実際の神のみことばから、どんどん遠ざかっていっています。そして何かが起こると、神のみことばを調べて神のみことばに照らし合わせるよりも、むしろ律法学者や祭司、宗教上の役職者なら誰にでも尋ねるのです。彼らはイエスを知りません。イエスのみことばを知りません。イエスの復活も知りません。そして間違いなく、彼らにはその復活の力がありません。驚くべきことに、彼らがエマオへの路上でイエスにそれらのことをすべて説明してしまうと、聖書にはこう続けられています。

**「するとイエスは言われた。『ああ、愚かな人たち。預言者たちの言ったすべてを信じない、心の鈍い人たち。
(ルカの福音書24:25)」**

イエスは、「あなたたちがわたしの言ったことや、わたしの家族や友人たちの言ったことや、他の使徒たちの言ったことを信じなかったのは構いません。でも、少なくとも、預言者たちの言ったことは信じるべきでした。少なくとも神のみことばは信じるべきでした」と言われたのです。それからイエスは彼らに言われました。

「キリストは、必ず、そのような苦しみを受けて、それから、彼の栄光にはいるはずではなかったのですか。』それから、イエスは、モーセおよびすべての預言者から始めて、聖書全体の中で、ご自分について書いてある事がらを彼らに説き明かされた。

(ルカの福音書24:26-27)」

素晴らしいではありませんか。

イエスは、ご自分について書かれている事から、旧約聖書全体を通して説明されたのです。イエスはカトリックだったのか、正教派だったのかと、人から質問されることがあります。そういう時、私はいつも、イエスはクリスチャンでさえもなかったのだと答えます。イエスはユダヤ人でした。イエスはユダヤ人としてこの世に生まれましたが、それでいて神の御子であられたのです。イエスは全世界を救われるために来られました。イエスが新約聖書から聖句を引用されたことは一度もありません。「私にはユダヤ人に伝道したり、福音を伝えたりすることはできません。ユダヤ人は新約聖書を信じていないから。」と言う方々がいます。皆さん、いいですか。新約聖書を信じていなくても、新約聖書を知らなくても、イエスがメシヤであることを理解することは可能です。信じている皆さんが、旧約聖書全体を通して、イエスがメシヤであり主であることを説明し、示し、証明することができるのです。それと同じことを、イエスはこの二人の弟子になされたのです。何と素晴らしいことでしょう。私は、この時のイエスの教えが文字になって残っていたらいいのにとおもいます。私は、天の御国でイエスにお会いしたら、その原稿をいただけるようお願いしたいと思っています。

圧倒されませんか。極めて感動的ではありませんか。イエスは、実に、私たち一人ひとりに尋ねておられるのです。「わたしやわたしの言ったことが問題なのではありません。あなたはわたしの言ったことをあまり真剣に受け取らなかったかもしれない。けれど、少なくとも預言者たちの言ったことは信じなさい。わたしは、わたしについて預言者たちが語ったことをすべて成就するために来たのです。」イエスご自身が、昇天される前に、弟子たちにおっしゃいました。ルカの福音書24章44節です。

「さて、そこでイエスは言われた。『わたしがまだあなたがたといっしょにいたころ、あなたがたに話したことばはこうです。わたしについてモーセの律法と預言者と詩篇とに書いてあることは、必ず全部成就するということでした。』(ルカの福音書24:44)」

イエスは言われました。「人間の伝統を信じてはならない。悲しんではならない。神のみことばを信じなさい。」イエスは愛をもって、思いやりをもってそう言われたのです。イエスは彼らに理解してほしいのです。イエスには、この弟子たちにご自身を顕して、この会話を全部省略することも容易にできたはずですが、しかし、イエスは彼らが理解することを望まれたのです。「預言者たちが語っていたのは、このわたしのことなのだ。わたしが、預言者たちが語ったことすべての成就なのだ。このわたしが、イスラエルの民と全世界とに約束され、遣わされたものなのだ。」

偶然など一つもありません。この世の基が築かれるよりも前に、神がお定めになった素晴らしいご計画、驚くばかりの壮大な救いのご計画があるのです。イエスはこの弟子たちの注意を喚起しようとしていました。イエスの言ったことでも、ペテロやヨハネの言ったことでも、マリアの言ったことでさえもなく、預言者たちが語ったことだったのです。

私たちが神を知らなくても、神は変わることのないお方です。私たちが神のみことばを知らなくても、それで、神のみことばが変化しているとか、神のみことばが私たちの考えにそぐうべきだ、ということにはなりません。

神のみことばを知らない限り、神のみことばを読まない限り、神のみことばを理解しない限り、これをすべて理解することはできないでしょう。神の御霊には、あなたの目を開くことができます。そして、あなたの心を開き、御霊の言うことを理解できるようにすることができます。

旧約聖書を通してご自身について書かれてあることを、イエスが彼らに明らかにされ、彼らが目的地に到着して食卓に着き、イエスがパンを取って裂かれた瞬間に、彼らは十中八九、イエスの刺し通された手に気づいたことでしょう。彼らの目は、すぐに開かれました。聖書にはこう書いてあります。

「彼らは目的の村に近づいたが、イエスはまだ先へ行きそうなお様子であった。それで、彼らが、『いっしょにお泊まりください。そろそろ夕刻になりますし、日もおおかた傾きましたから。』と言って無理に願ったので、イエスは彼らといっしょに泊まるために中にはいられた。彼らとともに食卓に着かれると、イエスはパンを取って祝福し、裂いて彼らに渡された。それで、彼らの目が開かれ、イエスだとわかった。するとイエスは、彼らには見えなくなった。そこでふたりは話し合った。『道々お話しになっている間も、聖書を説明して下さった間も、私たちの心はうちに燃えていたではないか。』(ルカの福音書24:28-32)」

私たちが聖書を読むとき、神の御霊が私たちのうちにおられれば、私たちの心は、うちに燃えるのです。私たちが、イエスに関することをすべて理解するからです。それを考えてみてください。エマオへの道のりで、彼らがエルサレムから離れれば離れるほど、彼らは真理から離れて行きました。彼らは、実際に、イエスから離れて行ったのです。彼らのいるべき場所から。そして彼らは、イエスが彼らに説き明かされたことを理解するや否や、もう日が暮れていたことも、その旅には危険が潜んでいたかもしれないことも、少しも気かけず、すぐさまエルサレムに引き返して行きました。私たちは皆、迷い出してしまいました。しかし、神の御霊があなたに触れ、神の真理があなたのうちに宿ると、すぐにあなたがしなければならないのは、悔い改めです。それは、向き直って神のもとに戻ることを意味します。自分の思い通りにではなく、神のみこころに戻るのです。もしかすると、あなたはエマオへの路上にあるかもしれません。もしかすると、あなたはまだ盲目にされているかもしれません。もしかすると、あなたはイエスを知らないかもしれません。もしかすると、あなたはイエスについて聖書に何と書かれているかを知らないかもしれません。もしかすると、あなたはまだ悲しんで、落ち込んでいるかもしれません。しかし、あなたがイエスを選ぶ瞬間に、その悲しみは喜びに変わり、その絶望は嬉しさに変わります。そして危険はもはや問題ではなくなります。あなたはその道を歩んでいくのです。「たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわざを恐れませんが、あなたが私とともにおられますから(詩篇23:4)」と、詩篇23章にあります。

では、ヨブの言葉をもって締めくくりたいと思います。イエスがそんなにも特別なのは、イエスが生きておられるからです。私たちが特別なのは、私たちが死んでしまったメシヤを信じているのではないからです。私たちは、メシヤが来るのが遅くなっているとか、メシヤは来なかったとは思っていません。私たちは、私たちの贖い主が来られたことを知っています。私たちは、預言者たちが言ったとおりに、私たちの贖い主が私たちの罪のために死なれたことを知っています。私たちは、彼が死ななければならなかったことを知っています。私たちは、彼がよみがえられたことを知っています。そして、私たちは、私たちの贖い主が生きておられることを知っています。ヨブは、それを最も美しく語りました。ヨブ記19章25節をお読みします。

「私は知っている。私を贖う方は生きておられ、後の日に、ちりの上に立たれることを。(ヨブ記19:25)」

イエスは生き続けます。イエスは生きておられます。イエスを信じますか。もしも、あなたがエマオへの途上にあるなら、向き直って、あなたのエルサレムに戻ってください。あなたの約束に戻ってください。イエスは生きておられます。